

# 学生編集委員 × 土木 = 土木業界の未来

[WEB取材] 旧学生編集委員

[取材協力者] 池谷 風馬、藤原 茜、渡邊 雅大

連載「かける土木」では他分野からみる土木に焦点を当て、他分野と土木を掛け合わせることでどのような可能性が生まれるのかを、インタビューを通してお伝えしていきます。最終回となる今回は、昨年の6月まで2年間学生編集委員を務められた池谷風馬さん、藤原茜さん、渡邊雅大さんにインタビューを行い、皆さんの土木に対する思いを聞きました。

——所属と研究分野を教えてください。

**池谷**——大学院博士課程で交通工学・都市計画の研究をしています。

**藤原**——大学院修士課程で鉄筋コンクリートの非破壊検査についての研究をしています。

**渡邊**——大学院修士課程で鉄筋コンクリートの非破壊検査についての研究をしたのち、現在は都市高速道路会社で働いています。

——土木を学ぼうとしたきっかけを教えてください。

**池谷**——私は高校の地理の授業がきっかけでした。地理を通してまちづくりを知ったのをきっかけに、土木の道に進みました。

**藤原**——私はもともと建築に興味がありました。伯父から土木を勧められ、土木に興味を持ち始めました。さらにモノを作るのが好きだったことと

社会に貢献したい気持ちがあり、土木の学科に進みました。

**渡邊**——私は二つきっかけがあります。一つ目は、小さいころからブロック遊びが大好きで構造物に興味があり、地元広島の新交通システムの高架下を車で走っていた時に「構造物ってどのように設計や工事がされているのだろうか？」などと関心を持ったことです。二つ目は、大学1年生の時に豪雨による広島市の土砂災害(2014年)の被害を目の当たりにしたこと。その経験より、人々の当たり前前の生活を支援したいと思い土木を専攻しました。

——土木を実際に学んでみて土木のイメージは変わりましたか。

**池谷**——大きく変わりました。初めは「工事現場」「土を掘る」という限られたイメージでしたが、学ぶうちにコンクリート、橋、水の流れなど、土木

の対象が多岐にわたることを知りました。

**藤原**——私は高校までは建築と土木の違いもよく知りませんでした。土木を学んでみて土木は無意識に誰もが当たり前に使っているものだと知りました。建築は美術館やホテル、住宅などを手掛けますが、人々が無意識にそういった建築物に入ることはまずないと思います。逆に土木は水道管や地盤などを手掛けていますが、当たり前すぎて使っていることに気付いていないものが多いと感じました。

**渡邊**——私は基本的にはイメージは



図1 昨年の6月まで学生編集委員を務められた皆さん(下岡委員作)

変わっていません。というのも大学2年生春の分野選択の際、建築と土木で迷っていました。建築と土木それぞれの先輩方からお話を聞き、土木はより力学的要素が強い等、土木のことを比較的知った上で土木を専攻したからです。

——土木学会誌編集委員会(以下、編集委員会)に入ったきっかけを教えてください。

池谷——研究室の先輩が元委員というのと、土木展の手伝いをしたことがありそこで編集委員会を知りました。当時から研究者を目指しており、先輩方とも話すことができると思い編集委員会に入ろうと決心しました。

藤原——大学入学時に「ようこそドボク学科へ！」(佐々木葉 監修)という本を読み、編集委員会の紹介をしていただいた記事がありました。土木学会に学生として参加できる唯一の委員会です。ごくためになると書かれていたため、編集委員会に応募しました。

渡邊——前編集委員長の鎌田敏郎教授(現、大阪大学大学院所属)から編集委員会のお誘いをいただきました。加え、研究室以外のさまざまな人と出会うことができ多くの知見が得られ

ると思ったため、編集委員会に応募しました。

——学生編集委員を通して土木について感じたことを教えてください。

池谷——私は土木の分野の広さを感じました。中でも印象的だったのが、点字ブロックも土木だったことです。各ブロックの配置計画も土木につながっていると知り、土木への視野が広がりました。

藤原——私も編集委員会での会議や取材を通してこれも土木なんだと感じることが多かったです。土木の世界には自分の知らなかった仕事もたくさんありました。

渡邊——私は土木が幅広いと感じたとともに、全国には土木に関する活動をしている方が多くいらつしゃると感じました。それまでは、研究室という小さなコミュニティの中にいたので気付きませんでした。土木に対して熱意を持ちさまざまな形で社会貢献されている方がいることを知り、自身も土木業界および土木学会誌によりよく貢献していこうと思いました。

——これからのような土木技術者・

研究者になりたいと考えていますか。

池谷——私は土木を楽しみつつ、ブレない軸を持つ研究者になりたいと思っています。編集委員会に入り、土木を楽しく話す多くの方々に出会いました。そういった方々のようにになりたいと思っています。自分が楽しんだ上で人に伝えられるものがあると思いますので、土木を楽しみつつ研究をしていきたいです。さらに、メリット・デメリットを理解した上でトレードオフの関係を考えられる研究者になりたいです。土木には正解がありません、一方にメリットがあり他方にデメリットがあるということが多いと思います。その際、両者を知らずにメリットをとること、知った上でメリットをとることは全く違うと思います。デメリットを知った上で選択をするという見方を軸に持つてやっていきたいと考えています。

藤原——ありきたりになってしましますが、全ての人が使うからこそ安心して使える構造物を維持していけるようになりたいです。私が研究している非破壊検査の研究はより長く構造物を使うために必要ですが、実用に至っている例が少なく伸びしろが大き

いため、非破壊検査の分野から構造物の維持管理に貢献していきたいと考えています。

渡邊——私は発注者として利用者および地元の方々の視点に立った設計、建設を行っていきける技術者になりたいと考えています。例えば、普段目にする標識に関してもより利用者の安全を確保できる設置位置等を踏まえた設計をできるようにしたいです。また、編集委員会では情熱を持って積極的に活動される方が多く、そこに感化されたこともあり、そのような情熱と自分の意見を持って社会貢献していきたいと思っています。

### お話を伺って

今回の取材では全員似た考えがあったり二者二様の考えもあつたりと、さまざまな興味深い話をお聞きし、有意義な時間を過ごすことができました。何より、皆さんの土木愛を感じました。今回は取材にご協力いただき、誠にありがとうございました。

(担当編集委員: 益田裕太、下岡優希)